



## 主任コラム7月号

主任 澤井 良子

幼児クラス的环境が5月末より変わりました。今までよりも、ゾーンとゾーンの境目が明確になり、子ども達がじっくりと好きな遊びに集中でき、部屋の真ん中には、円のソファが置かれてゆっくり身体を休めたり、気持ちを落ち着かせたりする場所もできました。環境を整えていく中で、子ども同士の関わりの幅が広がり、やりたいことに打ち込む集中力が育っていったらいいなと思います。

保育園では0歳児から5歳児までが過ごしていますが、毎日の生活の中で喧嘩や思いのすれ違い・相手の思いに気づけなかったことからくる友達関係のトラブルが沢山起こります。人の感情は3歳までに育つといわれていますが、大人が見ている代弁して伝えてあげることが大切なのは0・1歳児。2歳児からは、自分で伝えながらも大人に入ってもらいながら相手の気持ちを知っていき、3歳児以降は自分の思いを伝えながらも相手の気持ちに気付こうとし、相手の言い分も聞き入れようとする共感の部分が育っていきます。特に異年齢で生活していると、その部分が年齢別で過ごすよりも大きく成長しているように感じます。それは、同じ発達の子ばかりでなくいろんな年齢・発達の子達がぶつかり、言い合いする中で、いろんな角度から見ている子ども同士で話合える環境があるからだと思います。

保育の中でのトラブルには必ず原因があり、その子達の思いがあります。思いや言い分を聞いてあげ、子ども達自身が心から納得し「いけなかったな」「ごめんねと言いたい」とならなければ本当の解決にはならず、相手の思いに気付くことはできないと思います。子ども達の中には「大人に知られたら怒られるから言いたくない」という子もいますが、「怒られる」の感情が先に来るのではなく、自分の思いを言い出せる・話せる子ども達になって欲しいので、いつも『気持ちを教えて。やってしまったことを怒ってないよ。〇〇ちゃんの気持ちを〇〇ちゃんの言葉で聞きたいな』と伝えます。時間がかかることはありますが、話し出すタイミングを待ってあげることも大事で、待つことにより少しずつ話をしてくれます。そして、話していくうちに気持ちの整理ができ、相手の気持ちや自分がしてダメだったことにも自分自身で気づくことができるようになります。

大人はトラブルを見ているだけではなく、どのようにして解決していくのか、気持ちをなかなか言いだせない子にはどのような思いがあるのかを『知る』ということから始まります。トラブルの結果だけをみたら手を出した子の方が悪い！噛んだ方が悪い！となってしまうますが、その過程には何があったのか、どういう気持ちだったのか『思いを聞く』『その子を知ろうとする』ことが大切だと私は思います。トラブルの数だけ成長もしますが、人を傷つけてはいけないことは勿論しっかり保育の中で伝えていきます。

今回、子ども同士のトラブルについて書きましたが、見守る保育のトラブルは見守っているだけではありません。ピーステーブルも子どもだけで解決させるのではなく、職員同士で情報共有し把握しながら見て関わっています。子ども主体の保育をするには、自分のやりたい環境と、自分の思いを受け止めてくれる人の存在が重要となります。ながさわ保育園では、それら個々の子どもの思いに対応できるように、0・1歳児、2歳児、3・4・5歳児の職員がチームとなり、個人の主観で子どもを見ず、色々な確度から1人1人の子ども達を見られるように保育を行っています。

